

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十三年二月一日発行（毎月一回一日発行）
第十七卷第十号（通巻第二〇二号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第202号

2. 2011

浜とんど

品川 鈴子

神棚と仏間は父が煤払ひ

小魚へ賀詞水槽をノックして

活断層の葉牡丹干支を一巡り

買初めは転ばぬ靴と常備薬



針はじめ手鋺目尺ぴったりと
なべて南へと磯そ馴なれの花アロエ
潮風に艫舵商ひ注連撓ふ
浜とんどホース方みな汐焼夫
とんど跡焦げ針金に絡まれる
焦げ風が招くとんどに遅れしを



玉鈴吟

愛媛 鈴木 浩子

姥が指す商家の系図吾亦紅
ミシン目の少し乱れて十三夜
門前茶屋唐辛子干す勝手口
畝傍陵鬮の実びつしり冠なす
天高しタイヤ持ち上ぐ象の牙

大阪 陶山 泰子

蜘蛛の囿に光る雨粒ネツクレス
重箱に三種のおほぎ紅葉山
吊橋は夫と同齡赤とんぼ
白山茶花スイッチバックの駅を守る
六地藏目深に被る冬帽子

香川 瀬口ゆみ子

狛犬も観客のうち村歌舞伎
木犀の香りと共に引越しす
菊花展審査ひかへて固蕾
緑結び叶ふや旅の栗丸し
引き出しに記憶を仕舞ふ浅き冬

岡山 高橋 大三

玉砂利に畏み秋の大極殿
鱗雲歩きづめなる遷都祭
爽やかに自転車走る平城宮
ただ広く朱雀門内私鉄駆け
秋晴れの朱雀門内私鉄駆け

兵庫 竹下 昭子

後先に姿無き道木の葉散る
南海へ粒をそろえしみかん山
どの家も蜜柑畑を背にしたり
鳥にはやらぬ算段みかん採る
大根の葉の中心に座わる犬

大阪 武田ともこ

鞠くはへ子犬花野へ分け入れり
君とゐる箱根山中蓼の花
とりあへず焼銀杏を注文す
台風が来て腰痛も来たりけり
ローランサン児の眼にも秋深む

大阪 武智 恭子

梅擬き紅き実つけて小鳥呼ぶ
紅葉する落葉手に取り子等にあげ
伊予柑の一箇だけ育つ見守りて
柿落葉ひらひら舞いて佳き景よ
ひよ鳥が榎木の実競い啄ばめる

愛媛 谷 泰子

曾祖母の鉄漿思ひ出す十三夜
近くより遠目が良けれ庭紅葉
木の葉髪物忘れまた繁くなり
耳鳴りの今朝は大きく冬に入る
身ほとりに続く訃報や年の暮

兵庫 恒成久美子

根こそぎの黒豆にあり日の匂ひ
湯元なる湯けむり霧と連れのぼる
団欒の宿に初物やき松茸
野菊やさし誓子・波津女の句碑に咲く
オルガンの響くチャペルに菊薫る

大阪 角谷美恵子

庭園の古き神殿柿たわわ
白足袋のゆると摺り足能舞台
オクターブの鍵盤のごと大根干し
奈良日和鷹ゆうゆうと大仏殿
着ぶくれのポケットに飴地藏堂

大阪 年森 恭子

水澄みて婉曲の術卒業す
剪定をして露はなり百舌の贄
視線ふと感じ背後の菊人形
新そばをすすり同門和みけり
まゝならぬ農地転用秋の雨

愛媛 内藤 三男

跡継ぐは案山子だけだと老農夫
六甲山ろくごうの透けて見え来し松手入れ
水鏡こはして掬ふ新豆腐
吟行の列散りぢりに通草径
秋灯や命つききたるボールペン

兵庫 中尾 廣美

そそくさと門を開ければ秋の蝶
秋深しチェンソー響く庭手入
葉から葉へそろりと移る残る蠅
トルストイ説く師の白髪秋澄みぬ
箱根園石段上れば返り花

兵庫 中島 霞

鳥声の澄みて山陵秋深し
母の忌の仏具を磨く小春かな
近況が俳句で届く冬うらら
消えさうな聴力支へ冬に入る
帝陵の鴨のお濠となりけり

大阪 中田 寿子

長谷寺のなぞえざらりと冬構
兼六園繩新しく冬来る
兄妹蜜柑の里に並ぶ句碑
冬ぬくし伊予青石の句碑開き
故郷を詠みし句碑へと冬日射す

兵庫 永塚 尚代

草の実や子らは真剣かくれんぼ
芋飯にお代りの列参観日
路地に鉢並ぶ下町櫨紅葉
都鳥去りて戻りし静寂かな
散り初めし銀杏大樹や焼死塚

大阪 野口喜久子

魂を鴉啄む捨案山子
新走り定席の友天に帰す
五つ玉の算盤弾く西鶴忌
落葉踏む終らぬ恋の音をさせ
やうやくに針孔を通せり縁小春

神奈川 蓮尾みどり

冬構ひとりの砦ひとり守る
碁石打つ音の強弱冴え渡る
男の焚火赤錆の一斗缶
湯気立てて酔うほど匂う酒饅頭
三十八度線分けて半島冬の陣

大阪 長谷川 鮎

寒鯛を捌きし指で五七五
遅刻して鯛焼の待つ席に着く
チンパンジー嘆きの壁に春を待つ
梅の香を東に向きて風見鶏
廃屋の庭に紅梅豊かにて

兵庫 林 哲夫

赤・黄・紫秋薔薇人に力水
松茸の香り厨に妻の古稀
主逝きもう届かぬや富有柿
末つ子はいつまでも居る朝焚火
塗装終ふ幕を外して冬日和

兵庫 林 美智

妣の里たまたま拾ふ虚栗
小春風鼻唄まじりピザを焼く
山眠る前の賑はひまなうらに
誕生日あれもこれもとおでん種
はやばやと居間にこもりて小夜時雨

愛媛 福島 松子

万年青の実ご意見番の声通る
尉鷓夫の自転車遊び場に
霊峰に赤き点々櫨紅葉
冬ざくら笑顔に裏の裏ありて
聞き返すこと多くなり帰り花

鈴の奏

品川鈴子選

木枯らしに画鋏負けたる揭示板 香川 横内かよこ

文化の日留学生の山形弁

終の場所選べぬらしき枯蠅螂

穴惑ひ外国籍の増ゆる街

留袖の金糸が光る紅葉越し 兵庫 田中 佳子

咳・寢息ねごと老いたる能の客

天高し帰国の機影蜻蛉ほど

菊日和優勝戦も面で決め

番鴛鴦望遠鏡に諍へる 三重 金子 清孝

長居して辞する庭先石路の花

名も知らぬ社に至る花八手

無人にて焼き立ての諸売る古道

絵画展準備の窓に大夕焼 兵庫 中井 光子

形も字も好きな満天星紅葉して

車掌より汽笛ぶえ買う秋の旅

手を止めて一勢に声大夕焼

適塾の白壁土塀紅葉降る 兵庫 植田 雅代

煙突の蒸気真横に 六甲風^{むこおろし}

天平の鴟尾よみがえる紅葉照り

老いし母見いる小枝にふくら雀

冷まじや定家葛の纏ふ岩 兵庫 改正 節夫

どんぐりに頭を打たれ誕生日

薄群れ塚をすつぽり南無阿弥陀

藤袴昔の教師立ちにけり

今日はちと寄り道しよう鱚雲 香川 石川 裕美

野分立つ父は寢床へ早々と

着々と腹に肉つけ冬仕度

秋時雨軒に干されしままの靴

解剖を終へ深呼吸吸菊の花 兵庫 鈴木 愛子

よく透る祝詞小春の地鎮祭

七五三いち姫二太郎羨しかり

新築の銅板の屋根霜の花

妣の味妻にねだりて煮る子芋 兵庫 津田 霧笛

飲む話着々進む良夜かな

秋祭日頃漁師のいなせ振り

空焦がす播磨の秋の高炉の火
運動会鳥もスキップしてゐたり

大阪 吉田 和子

ママを見たときとたん転ぶ運動会

廃材の乱るる径に白粉花

鯉の稚魚群れて川面をざわめかす

旅に出て案山子に並ぶVサイン
兵庫 平田恵美子

長き夜にまかせてはがき三四枚

朝寒や早口言葉むびよこびよこ

ハロウィンや文字化けでくる子のメール

捨て案山子僧形もあり高野口
兵庫 土屋 青夢

奥の院織田も明智も初時雨

紙漉の講師の若しいそいと

椿の実苺萱堂の棧にのる

日を吸へる柿の色さえ吉野道
大阪 丹後みゆき

野仏に柿並べあり柿どころ

柿の山軒つらねたる直売所

ぎんなんの色鮮やかに茶碗むし

街路樹のもみじさまざま性ありて
兵庫 北川 詠子

校庭は桜もみじの周りよし

木の葉落つ走るが如く地の上を

ひと言が波紋ひろごるうそ寒し

柿一つ啣えし鴉吾をかすめ
兵庫 水上 貞子

実の重き柿の幹裂け田で腐る

田一面大泡立草高齢化

菊花展今年も翁名を連ね

肌寒き秋にめずらし黄砂かな
鹿児島 原田 圭子

金峰山黄砂の衣冬かすみ

友と見し萬羽の鶴の来たるころ

温め酒夜長相手に又一本
福岡 山口 博道

昭和刀佩きし英姿は冬軍衣

烏瓜零錢自由と無人店

新米や銀飯と呼ぶ頃ありき

烏瓜我れに摘めよと顔を出す
愛媛 大西ユリ子

風の渦生まれ落葉の巻かれ行く

満月に線路枕木替える音

濃淡の紅葉を傘に碑文石

風化せる武将の墓に落葉散る
沖 則文

吊橋を埋め尽して紅葉狩

梅樽の湯船に落葉葵紋

一匹のごきぶりに夫けたたまし
城下 明美

牛膝洗濯に堪へ乾きをり

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 河村 泰子 〃

*選句は全て 品川鈴子

木枯らしに画鋏負けたる掲示板 横内かよこ

雨風に曝されながら掲示板に貼つたままの広告は、行交う人たちに久しく情報を伝え続けた。季節はいつしか移ろい厳しい凧が容赦なく木々を裸にしてしまう頃、広告をしつかり留めていた画鋏もついに力つきて、一陣の木枯らしに引つ剥がされた。鏝の兆す鋏針は広告紙もろとも、落葉掻きの塵に紛れ込んだか。もつとこまめに貼り替えるべきだったか。

菊日和優勝戦も面で決め 田中 佳子

剣道の腕をいよいよ大舞台で競うまでに上達し、礼節を重んずる武道にふさわしい菊日和「優勝戦に望む程の力量なら」「小手」「胴」他あらゆる技を駆使できる筈。生涯をかけた晴れの試合にはやはり「面」の正攻法で堂々と勝ち抜く。

番鷺鳶望遠鏡に諍へる 金子 清孝

おしどりはいつも雄雌が連れ添い、万葉集のころから仲

の良い夫婦の例えとされる。だが、水鳥の観察で雄翅の美しさを望遠鏡の視野に引寄せると、たまたま灰色の雌鳥が近づくと激しく声だかに追い払う。鴛鴦の生態は片割れの状態ではひと時も過ごせず、忽ち二対の相手を求めるので、人目に付くのは番の姿だというが。

絵画展準備の窓に大夕焼 中井 光子

長い時間をかけて描き上げた絵画。出展作を持つて集つた。オープン前の準備に皆追われている。窓の外など眺める余裕もないところ、部屋の誰かの声、「すごい！大夕焼けよ」、皆一勢に手を止めて、しばし見惚れる…。こんな情景を作者の他句と合わせて想像した。

天平の鴟尾よみがえる紅葉照り 植田 雅代

昨夏の猛暑と寒暖の差が激しかったこともあり、各地の紅葉は鮮やかで美しかった。遷都一三〇〇年の奈良には、薬師寺や唐招提寺をはじめ、格調高い由緒ある寺がたくさんある。まっ赤や黄葉に染まったもみじに照らされた鴟尾が、見る者に元氣と勇氣を与えてくれる。天平の躰もそうであろう。

冷まじや定家葛の纏ふ岩

改正 節夫

定家葛は、キョウチクトウ科の常緑木質の蔓植物で、暖地の山地に自生する。気根で他の樹木や岩石に這い上がる。藤原定家の古称としても用いられる。能の一つに、金春禪竹作の鬘物がある。定家と式子内親王の激しい恋の物語。死後も内親王の墓に定家葛がまつわりついたという伝説を脚色。その定家葛がまつわりついた岩を眼前にした作者。冷まじの季語が利いている。凄まじいに懸けたものである。

今日はちと寄り道しよう 鯛雲

石川 裕美

日頃は道草を食うこともなく、仕事が終わればまっすぐ家に帰る。今日のはが利いている。今日ぐらいは許されるであろう。三十代の女性に。鯛雲が生活感を表している。庶民的で健康なくらしが垣間見られる句です。些と(少と)寄り道とは、はてさていずこへ。私も一緒に歩きたい。

よく透る祝詞小春の地鎮祭

鈴木 愛子

新築の際、基礎工事に着手する前、その土地の神を祀つ

て工事の無事を祈願する祭儀。小春日和に恵まれ、穏やかな中に神主の祝詞が参列者の耳に心地よく響いた景がよく表現されている。私も十年前に地鎮祭を執り行ったが、当時まだ少ない女性の神主で、紫の袴に白い着物、黒の木靴。御幣を両手で振り、高音の一定のリズムが何とも心地よかったことを覚えている。

空焦がす播磨の秋の高炉の火

津田 霧笛

天高き青空にそびえる高炉からの火が、空を焦がすほどとは上手な表現である。播磨といえば、播州平野、播磨灘など思い浮かぶが、今では瀬戸内海に面した臨海工業地帯になっっている。高炉は製鉄工場で銑鉄を作る炉のこと。

運動会鳥もスキップしてゐたり

吉田 和子

日頃練習してきたマ스ゲームやかかけっこ。運動会は何歳になってもその日はわくわく、どきどき。リレーに走るとなると得意顔で、親たちを喜ばせてくれる。その親も、おじいちゃん、おばあちゃんも目を凝らして姿を追う。その目線の先にはおや！一羽の鳥がピョンピョンと。子どもではない一羽の鳥、意外性がおもしろい句になった。その姿も愛らしくスキップしているようだ。鳥の学校にも運動会があればなあと。

旅に出て案山子に並ぶVサイン

平田恵美子

竹や藁などで人の形を造り、田畑に立てて鳥獣が寄るのをおどし防ぐのが本来の目的であったが、最近では案山子まつり等も開催されている。時の人をターゲットにしたり、ヘルメットで身を守る案山子や小町風の妖艶な案山子、目まぐるしく変わる社会を風刺したりと様々な案山子たち。Vサインが何か得した気分になった。さてどんな案山子と並んで写真に。

紙漉の講師の若しいそと

土屋 青夢

越前で高級な和紙を漉く一人の男性が、紙漉き歌を唄いながら両手で巧みに紙を漉いていた。匠の技であった。手先や器械で物を造る仕事は、今や高齢化して次代に継ぐことが早急に求められている。この句、若い講師とは喜ばしい。過日手にした牛乳パックの再生で漉いた紙、なかなか味のあるハガキに変身していた。エコに敏感な若い人たちの作とか。今後に期待したい。

日を吸へる柿の色さえ吉野道

丹後みゆき

酒井田柿右衛門は、熟したあの柿の色を伊万里焼の赤絵磁器として完成させた。日本化した独特の美しい作品。特

有の色絵をもつ柿右衛門様式として多くのファンがいる。二十数年前、夫と一緒に伊万里焼の窯元を訪ねた。あの時の柿の色が忘れられない。この句、「日を吸へる」が生きている。柿色に満ちた吉野道、太陽を浴びて甘く熟成した富有柿だろうか。

街路樹のもみじさまざま性ありて

北川 詠子

人間も十人十色なら、街路樹として植えられたもみじもそれぞれ生まれもった性状がある。性分も違う。根性も違う。陽のあたる所で一番に新芽をふくのもあれば、隠で遅れる芽ぶきどきも。紅葉・黄葉もいろいろで一枚と同じ色のものはない。散りもみじもさまざま。子どもたちに人氣の絵本「葉っぱのフレディー」が頭をよぎる。

柿一つ啣えし鴉吾をかすめ

水上 貞子

野鳥のなかで鴉ほど人間と共存している鳥は他にないのでは。人を恐れず、時には人を嘲笑っているかのような鳴き声。最近では知恵ある鴉が多く、ごみの集積所には鴉除けのネットがかけられている。太い嘴でおいしそうな柿から枝を折り、へたをつけたまま罫に運ぶのか。わが家にも戸の戸袋にへたのついた丸ごとの柿を入られた。鴉の所業か。